

文藝春秋本社ビル

所在地 東京都千代田区

建物用途 事務所

竣工 1966年

所有者 (株)文藝春秋

設計者 (株)竹中工務店

施工者 (株)竹中工務店

維持管理者 (株)文藝春秋



〈審査評〉 東京オリンピックが終わり、1970年の大阪万博を控え、何かと動きの激しい時代の中の1966年この建築は日の目を見る。

株式会社文藝春秋は、大正末期創立以来自由平等と節度、中庸の精神と進歩的な姿勢を貫き、社会的に高い評価を受け続けてきた。

この本社ビル建設にあたって設計、施工に指名された竹中工務店に示された第一の要望は「文藝春秋」らしさの建築への具現化であったと聞く。当時、次第に多様化する建築表現の中で、その外観より受ける印象は方型のマッサと上端庇よりなるスカイラインを持つ端正なシルエットと、洗練されたディテールを持つ近代的な金属壁の表現での要望に応えた努力が読み取られる。

建築計画に2,400 mm のモジュールを基本とし、センターコアと外周の柱よりなる自由度の高い無柱空間を造り出すと共に重心の安定と軽量化された構造計画となっている。

また、コア外周部に設けられたペアーチューブ方式による設備システムは無柱空間と共に長寿命の重要要素である使用上の変化対応の十分な配慮がなされている。

また、外装に採用されているアルミカーテンウォールは、高度な技術開発による外皮としてメンテナンスフリーの長寿化を実現している。床面までの遮音気密性の高い硝子窓は開放的で紀尾井町の環境と一体となり、快適な内部空間を造り出している。また、社の性格上24時間使用と春秋の中間期使用に対して窓下部、床面近くに自然換気機構をサッシに組込む等、細部にも配慮がなされている。この換気口外部に取り付けられたステンレスの水切りと、建築スカイラインを構成する庇とが外壁の保護に十分な長寿化の効果を果たしている。

以上の長寿命化に配慮された計画になるため大きな改修もされず、設備備品の交換と、1994年、内部を原設計を損なうことのないようにリニューアルされている。

その後、敷地内に増設された新館と西館の建設にあたっては、本館の存在を中心に意識して、その調和を図りながら配慮されている。事務機能を主に持つ建築は時代のニーズに見合った機能を失った時には取り壊され、新たに造り替えられる宿命を持つてはいるが、この文藝春秋本社ビルは、社の精神を宿らせたメタフィジカルな精神的機能と長寿命を願ったフィジカルな事物性機能を併せ持つ故に文藝春秋の社の人々に愛され、これからも永く使用されるだろう。

このような建築への認識が社会に、そして街並みに定着されることを願う。